

アトリエ 琉游舎 だより 238号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2026年8月26日日発行

秋の彼岸会法要

9月23日（水）10時半

- 彼岸は悟りの世界。煩惱に満ちたこちら岸（此岸）に対して極楽浄土の向こう岸（彼岸）を表します。私たちは六波羅蜜の教えを実践する事により彼岸へ渡ることができるとされていますが凡人であるこの身では、六波羅蜜の教えを毎日実行することは難しいことなので、せめて春と秋の年2回はその教えを実行する。これが現在の彼岸法要の意味です。
- ちなみに六波羅蜜とは彼岸へ到達（パラミータ）するための6つの実践徳目。1 布施：施しをする。2 持戒：戒律を守り反省する。3 忍辱：不平不満を言わずに耐え忍ぶ。4 精進：一所懸命努力する。5 禅定：心を静かに保つ。6 智慧：真実を見抜く智慧をもつ。
- 彼岸」というとなにやら抽象的な場所に聞こえますが、私は日常のやすらぎのところが「彼岸」であると思っています。自分自身が自由で素直で柔軟になったときに顕れる心の平安が、「やすらぎのところ」であり、今生活しているこの場が彼岸です。
- 年に2回のお彼岸にはお墓参りや、おはぎを作ったり、茶をたてたり、瞑想したり、掃除をいつもより念入りにしたり、花を植えたり、鳥の声に耳を傾けたりと、いつもと違うことを一つ実践してみてください。それがあなた自身の年2回の六波羅蜜の実践です。
- 琉游舎で年2回の六波羅蜜の実践を一緒にしてみませんか？
- 暑さ寒さも彼岸まで」と言いますが、秋のお彼岸を過ぎると陽が沈む時間が急に早まってくるように感じます。暑かった夏とお別れをして、涼しい秋の夜長を楽しく迎えられよう琉游舎の秋の彼岸会法要で心穏やかなひと時をお過ごししてみたいはいかがでしょうか。
- 琉游舎の活動は営利事業ではありません。お布施は一切お構いなきようよろしくお願い申し上げます。宗教宗派を問わない、すべての皆さんのための開かれた「場」です。

写経会 9/6（日）13時半 読書会 9/8・9/22（火）13時半

狂言綺語…経験の継承

今年から40度を超える日は酷暑日と名付けられましたが、今年の私の8月は、猛暑日どころかクーラの必要は殆どなく、熱帯夜もあります。明け方は風邪を引かないよう、肌掛け布団を用意してから寝ます。毎日湿度が高く、激しいにわか雨が降ったかと思うまもなく、急に強い太陽の日差しが差し込む繰り返し。雨の止み間に散歩に出たところ、急に雨がザーッと降りだし、慌てて家まで駆け戻ることもありました。私の記憶するかつての夏は、露の下りる清々しい朝、過しやすい午前中も次第に気温が上昇していき、ピークは午後2時くらい、山の方に入道雲が立ち、今日は雷雨があるかなと心配しながら、蜩の声を聞く頃には、扇風機で夕涼みをして1日が終わります。毎日がこの通りであったか、確信は持てませんが、これが私の記憶に残る夏の経験です。ところがここ数年は猛暑が6月から始まり9月まで続くようになり、その間、24時間エアコンはつけっぱなし。これが新しい定番の夏だと思い始めていた矢先の今年の夏です。それは私の記憶にも経験にもない新しい夏。あえて比較するならば、旅行で行った雨期のカンボジアやベトナムで体験した気候のようです。これからの夏は、一日で強烈な日差しと雷雨を何度も繰り返す亜熱帯性気候になるのでしょうか。

私たちの思考や行動は、自らの経験の繰り返しが土台になっているはずです。経験は記憶となって心身に蓄積され、それが血肉となり更新し続けた結果が、今の私なのでしょう。食べ物や運動が身体を作り続けるのに対して、経験が私の精神と智慧を作り続けているはずです。経験は常に上書きされ続けているのです。これを社会や国家ならば、その構成員の経験の総体が更新され続け、今の社会や国があるのでしょうか。現首相がかつて「自分は戦後生まれで戦争をしていないのに、なぜ謝るのか」との主旨の発言をしていました。確かに本人の体験としての戦争は経験していません。しかし経験は体験だけでは得られも与えられもしません。知識、情報、対話、見聞などによって得られた事実やそれに対する智慧や感情こそが経験です。自分一人だけの体験だけではわずかな経験しか得ることはできません。他人の体験を見聞して自らの智慧と精神の中に取り込むことで、私たちの経験は豊かで多様なものになります。それは歴史（先人の経験）を自らの経験に生かしてそれを未来を生きる人に伝えていくことです。それが文化であり伝統といわれるもののなです。

私はお釈迦さまの弟子、日蓮宗の僧侶です。私はお釈迦さまや日蓮聖人、その経験を長年に渡って更新し続けて私に受け渡してくれた人々の経験を、今受け取っています。それはお釈迦様や日蓮聖人の経験（伝えられた言葉）をなぞることではなく、それをどのようにして自らの経験とし、次に繋げていくかということです。その数多の経験から、私が選択した経験の中にそうでなかったものも摂取して信行し続けることが僧侶なのです。残された言葉や行動記録をお釈迦様や日蓮の教えだとオウムの如く繰り返すだけの人々は、何を経験として人々に繋げたいと願っているのか理解できません。そして僧侶を名乗る人々の大半は、私には理解できない人達です。僧侶がその人々を意味する名称ならば、私は僧侶の名称を捨てることも厭いません。

日蓮の言葉（経験）の中で、ひときわ影響力が強く、未だに日蓮宗も強く発信し続けている言葉に「我日本の柱とならん、我日本の眼目とならん、我日本の大船とならん」があります。流刑地佐渡で記した「開目抄」の中の「三大誓願」と呼ばれるものです。日蓮はこの誓願の実現のために生き、信行し続けたのです。この誓願は勿論、日蓮の信行（経験）が語らせた言葉（経験）です。言葉の表面だけをなぞるだけならば、日蓮の言葉は何の意味も価値もありません。この言葉（経験）を多くの日蓮の経験を繋ぐ者たちが、自らの経験と融合させて、新たな経験を私たちに示し、示された私たちがそれをまた次に繋ごうとすることで、初めて意味を持つ言葉なのです。これが真の意味での教えの継承、信仰の実践（信行）なのです。

先人たちは日蓮の経験をどのように継承してきたかを概観してみます。1、単に教えの解釈ではなく、命を賭して教義を実践する「行者」の覚悟と主体性を提示した。2. 国家的難局における蒙古襲来などの外患と国内の混乱が重なる時代に、政治権力に頼るのではなく、自らの信仰と信念によって「国家・民衆の精神的支柱になる」という強い自負を示した。この二つが日蓮の経験が私たちに示した言葉（信）。それを実践

（行）で受け継いだ人々は、思想的には左右両極端の信行へと分かれていきます。ひとつは、近代に於ける国体論や超国家主義運動へと向かいました。それは田中智学や石原莞爾の提唱する日蓮主義に基づく「日本国家の世界的使命」となって、最終的には軍国主義から戦争へと向かいました。もうひとつは権力に対する批評精神の源流となり、思想運動や社会運動へと向かいました。キリスト教の思想家内村鑑三や、作家の宮沢賢治、社会活動家として戦中のファシズムと戦った妹尾義郎などです。極右から左翼の実践家まで数多の信行者に日蓮の経験は受け継がれました。私は、それぞれの経験の正否、善悪を問おうとはいたしません。

「信」は個人の心のもの「行」は社会の体制の中で実践されるものだからです。個人の「信」を組織化して社会の「信」に変えなければ実践は不可能なのです。だからどんなに個人の「信」が強固なものであっても、信行の正否も成否も社会と時代に判断を委ねなければなりません。言葉だけに安住して行の伴わない者は「信」を裏切る者です。自分の可能な信行の道を見極め進むこと、唯一それが日蓮の経験の継承者なのです。

自ら体験していない戦争を謝る必要は無いと言い放った日本の指導者の、今までに上書きされ続けた経験は果たしてどんなものなのでしょう。少なくとも日本が戦争を起こしたという事実は彼女の経験、つまり精神と智慧の一部とはなっていないということでしょう。それは敷衍してみれば、日本人が積み重ねてきた歴史（先人の経験）を知ろうとしないということです。その様な指導者が騙る日本の文化や伝統は改竄されたものにならざるを得ません。その様な指導者に私たちは未来を委ねていることを、自覚すべき今なのです。